

# 平成25年度 F小学校

研究テーマ

**発達障がいのある児童へのファーストアクションを就学直後に持ち、有効な支援につなげる**

**—発達障がいの可能性のある児童への教職員の一致した認識と、学校の支援体制を作るために—**

## 1. 課題設定の趣旨

本校は、駅前に商店街がある住宅の多い地域に位置する、児童数約250名、通常学級10学級の小規模校である。

本校の児童の中で、「1歳半や3歳児検診で気になることがあった」という内容の引き継ぎを保育所や幼稚園から受けることは少ない。大抵の場合、検診では何も言われずに就学してくる。

児童の中には、不登校傾向、学習理解の困難、生活指導上の課題等、支援が必要な児童が数多くいる。生活指導連絡会で報告されるケースの中には、発達障がいの特性がある児童が含まれることも多い。高学年で問題行動が表出する前に、小学校入学後、できる限り早い段階で発達や認知の特性を捉え、有効な支援につながるよう実践する。

## 2. 実践・研究の計画、方法

### (1) 低学年児童の適切な実態把握

- ア コーディネーター
- イ 巡回相談による気づき・支援方法の理解へ

### (2) 障がい理解のための研修

- ア 困った行動への対処法
- イ 感覚の問題から考える

## 3. 実践・研究

### (1) 早期からの取り組み開始…保育園、幼稚園との連携

コーディネーター2人で、就学児童の出身保育所、出身幼稚園にでかけ、主体的に発達の問題を投げかける聞き取りを行った。「このエピソードを持つ幼児ならこんなことはありませんでしたか?」「こんな支援方法も取っていたのでしょうか?」など、気づきの視点を耕し、園生活の中で気になっていることを1年担任に受け継いだ。

クラス編制会議の時点で、あらかじめ配慮や支援が必要な幼児の情報が共有され、後の会話でも、「Aさんの様子はどうですか?」など職員室でも話が出しやすい。

## (2) 第1回巡回相談（低学年を中心に）

高学年になり、児童の困っている様子を教師が背景に発達障がい疑った場合、保護者に不信感を与えることになる。低学年のうちから「こんな工夫で、Bさんは理解しやすくなったようです。〇〇ができました」という事実を積み上げていくことが、保護者に「子どもに合わせた支援が子どもの将来に役立つ」という認識や学校への信頼につながることをねらい、低学年を中心に巡回相談を依頼した。各クラスにいる気になる児童に対する有効な支援方法について個別に担任が助言を受けた。また、ことばの教室の出前授業も活用した。特殊音節を含む簡単な20問聴写テスト(高槻市式)を12月初めに低学年全員に実施し、「音韻意識の弱さ」や、「表記規則の理解について」児童理解を進めた。

そして「ちょっとかわったことばの勉強」をことばの教室の出前授業として計4回行った。低学年の内に読み書きの力を強化し、特に逐次読みの児童には、その原因を探り、保護者からの理解を得て、2クラスから4人の児童との学習会を行った。

## (3) 支援の具体的な内容（低学年）

巡回相談を終え担任間での実態把握が進み、今後の支援について2つの切り口から考えた。

1つ目は、ABC分析の基本を学ぶために教育センターからの校内研修を受けた。大声を出す、教室内の立ち歩きなどの「困った行動」を取る児童に対して、その行動のもつ意味、その「機能」を考え、記録をとり、働きかける。また、望ましい行動に目を向けることができているかどうかなど、「困った児童ではなく、児童が困っていること。その児童を上手にほめることで、行動は変えられる。」と、理論的に強化してもらった。誤学習、未学習という視点についてアドバイスを受け、「まさかそんなことを知らないわけがない」と思いがちなことを振り返る機会となった。

さらに、2つ目は作業療法士の視点を取り入れた。立ち歩きや、ドンドンと音を立て人に迷惑をかけていることで叱られている児童を、感覚刺激という捉え方で見ると学んだ。触覚刺激を使ったり、体育で固有覚・前庭覚刺激を用いたりする大切さを教わった。「強めの感覚刺激を取り入りたい児童、過敏だから感覚遮断が有効な児童が区別できた」と低学年の担任の感想はとても良かった。

普段からからだの感覚を大事にしている担任のクラスでは、「おしくらまんじゅう」や



日時：3学期 第2、第4の木曜日の特定の日  
14:45~15:25

場所：1年の教室

予定プログラム・・・1/23, 2/13,  
2/27, 3/13の予定です。

1	つまる音…読みの速さ調べ、音韻あそび、表記規則、早口言葉
---	------------------------------

2	のびる音(ア段からオ段)…母音の感覚、エ段・オ段の例外
---	-----------------------------



マット運動の「ごろごろ回り」を楽しむことができ、そのような遊びや体育の授業の後では、「困った行動」が激減していることにも気づくなど重要性を共有することができた。

また、担任の指示のもとに児童を支援する教育活動支援員が、週3日勤務している。「学習理解の難しい児童」「多動や私語の多い児童」について支援をしてください、という指示だけでは十分な効果は得られない。

そこで、その日の様子をファイルに書き込むことで、児童の様子を共通理解し、その時々への対応をコーディネーターと教育活動支援員とが話しやすくした。また、発達障がい理解を進め、問題行動の対応方法を細かく話し合った。1日1クラスに1時間程度の活用であること、児童の状態が日によって違うことから、疑問に思ったことがあればすぐ聞けるという窓口の役割が重要だと考えている。

#### 4. 実践・研究のまとめと今後の課題

低学年の早い段階にファーストアクションを取る。という方針があると、問題の早期発見、早期対応が、有効に働くのではないかとと思われる。

「まだ1年だし、様子を見て」という意識も働きうるが、「1年だからこそ、後々に影響する」という意識醸成ができつつある。

低学年からの積み上げが、校内の特別支援教育の土俵の土盛りをすることではないかと考えている。高学年になり、問題行動が表出し悩みぬいた保護者が診断を受けてから指導・支援をスタートするのではなく、それに至らぬように低学年から始めたい。

性急に保護者の障がい受容を期待してはならないが、クラスで日々生起する問題のなかに発達障がいがかかっているのかどうかを思慮深く考察できる力量を持った教員でも、親との関係悪化を望まず自分で抱え込むこともある。また、学年を経るにつれ、ますます言いづらく、ますます具体的な支援が校内で共有されにくくなることは明らかである。「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査（文部科学省 H24.12.5）」では知的発達に遅れはないものの学習面又は、行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は6.5%とにのぼることが示されているが、十分に支援が行き届いているとは言い難い、いくつかの事例を本校も抱えていた。

できるだけ早く教職員の一致した認識を得る。それは支援の届き方に質的な向上をもたらすのではないかと考えて、1年間取り組んできた。低学年のベテランの教員は、意識的に支援の方策を取っていることも、共有化されてきた。

教員間の引き継ぎの細やかさを個人の技量だけではなく、組織として力量を高めていくことが今後の課題と考える。